

熊本時代の `漱石異聞、 : 五高端艇部員「事件」 : 愉快犯・篠本教授の「証言」と夏目教授のアリバイ

服部, 英雄
くまもと文学・歴史館 : 館長

<https://hdl.handle.net/2324/1932059>

出版情報 : Cultural story of Nishinohon. 486, pp.48-53, 2018-04. 西日本文化協会
バージョン :
権利関係 :

熊本時代の「漱石異聞」

五高端艇部員「事件」

服部英雄

愉快犯・篠本教授の「証言」と夏目教授のアリバイ

端艇部長 夏目教授

集』別冊上三三三六、斉藤阿具の回想、同別巻参照。

夏目金之助（漱石）は明治二十九年（二八九六）から四年間、（旧制）第五高等学校の教授として熊本に赴任した。初年度に端艇（ボート）部長を引き受けている。

漱石は東京での学生時代に漕艇経験があつて、Back Club という名の黒い帽子を被ったクルーの一員だった（大田達人の回想、『漱石全集』別巻および『五高と漱石』）。赴任した年の冬には五高第一回・競漕大会が江湖で開催され、彼も職員の一部に参加、赤色艇の二番漕手として力漕し、三艇身の大差をつけて黄色艇に勝っている（九州日々新聞、『五高と漱石』）。

漱石は二十年後の回想で、「運動は好きの方であつたが、身体が虚弱であつたため、規則正しい運動を努めてやったというわけではない。唯遊んだという方に過ぎないが、端艇競漕（ボートレース）などは先ず好んでやった方であろう」と語っている（談話『漱石全

岩佐正雄（注2）
松原常與
夏目金之助
櫻井房記
中川元

翌明治三十年、五高は端艇部の艇・施設の充実を計画し、五月二十日付けで、拡張主意書（募金依頼書）を作成している。金之助は部長であつたから、その責任者となつた。長大な主意書および添状の書翰の二点からなつていて、全文が「龍南会雑誌」（注1）に掲載されている（A）。また夏目金之助より侯野道介宛てられた添状がくまもと文学・歴史館に所蔵されている（写真B）。（A）から添状末尾を引用しよう。

追白 学課の都合有之、事務取扱上困難を感じ候條、右御舎の上に第五高等学校内夏目金之助迄何分の御回答賜り度候也
五月廿日

石坂十郎（*彼の署名は写真Bにはない）
吉田久太郎
富田定寿

では篠本に言及することになる。篠本は教員の中での序列は、ここでは最下位であつた。五高生は期待の星である。主意書に依じて各名士が資金を提供、九州大名家に由来する侯爵三家に至つては、それぞれ百円を提供している（「龍南会雑誌」(81)）。

そのころ、日清戦争で鹵獲した小艇が十隻余あつて、うち二隻が五高端艇部に「御譲与」されることになった。拡充運動の効果は絶大だった。帆など調整を要する箇所があり、佐世保に滞在中の部員二名（五高生富田・吉田）に指図を与えるよう依頼状が出されている（注3）。

部員生徒百円弱使い込み「事件」

ところがこのとき事件が起き、漱石と夏目金之助・教授がその解決に一役買ったとされている。すなわち『五高七十年史』『五高人物史』によれば、かれら生徒たち二名（あるいは廻漕に当たつた数名が「赤字を出し」大いに飲食して「百円弱を使い込んだ」とある。引用しよう。

『五高七十年史』（昭和三十二年）

前年四月十四日付を以て赴任したばかりの夏目教授（七月九日まで講師）は間もなく龍南会の端艇部長に委嘱された。たまたま

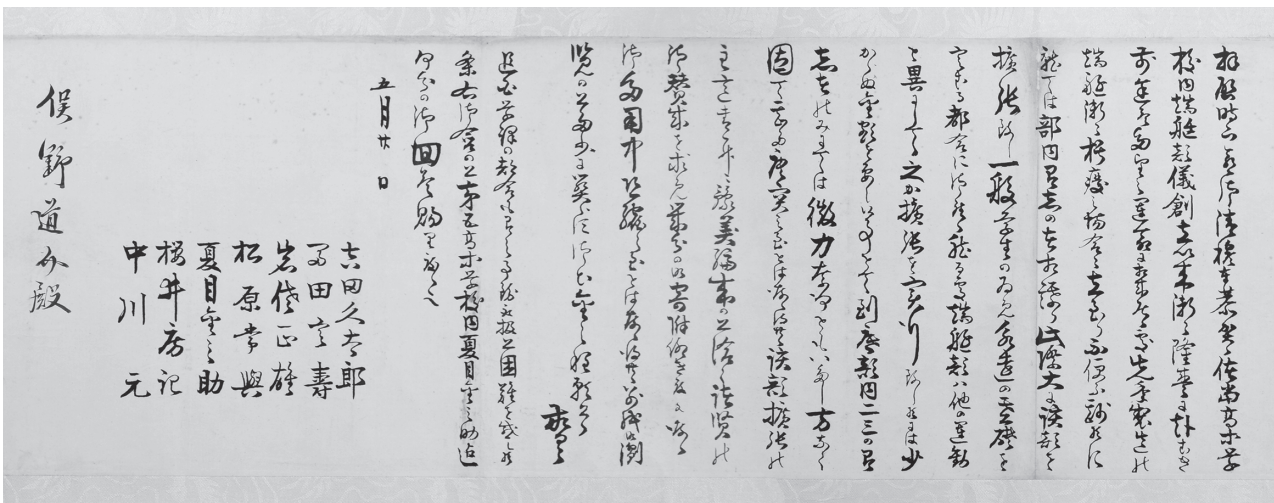
学校事務部（学課）はこのような正規外の募金雑務を引き受けなかつたらしく、夏目金之助が募金の責任者、いわば雑務係になっている。着任してから一年目の新人でもあり、学校運営は積極的に引き受けていた。差出人のうち石坂十郎以下三名は端艇部員（「龍南会雑誌」の別箇所では石坂二郎）。富田定寿と吉田久太郎の二名は端艇部の主将・副将と考えられる。彼ら二名は、本稿にこのあとも出てくるので、しばらく記憶しておいてほしい。夏目金之助に続く櫻井房記が教頭で、中川元が校長である。奥に名前がある方が高位であつた。

募金の目標額は千六百三十円であつた。うち四艘の新艇制作費が七百円とある。主意書の方の末尾に学校職員賛成者二十二名の名前がある。上段下段にそれぞれ二名が書かれているが、こちらは書翰（添状）とは順番が逆になつていて、一行目が最高位、校長中川元・教頭櫻井房記に始まつて夏目金之助は四行目の上段にある。最終行の下段、教員の末尾、二十二番目に篠本二郎がいる。以下本稿

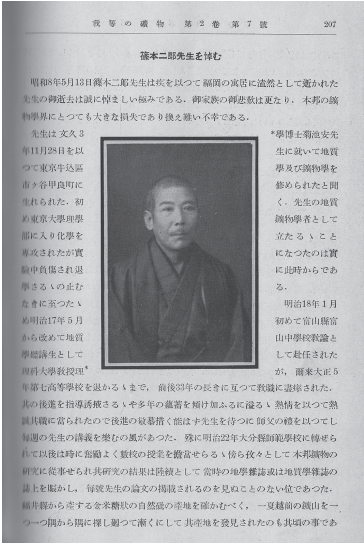
龍南武勇伝中の一人吉田久太郎氏（他の一人の相手は日露戦争当時、北滿に於いて勇名を轟かし、沖・横川と並び称せられた沖積介氏（正しくは富田。沖は退学しており、いない）（注4）がその指揮者と為り大任は果たしたが、そのために百円、少く見積もつても今の七・八万円近くの赤字を出して、さしもの勇士もほとほと困つて居たときに、その事を耳にした教授は平然とそれを償つてやり、部長を辞したと伝えられて居る。念のために記せば夏目教授の初任給俸給は月額百円であつた。

『五高人物史』（昭和三十四年・一九五九、五高人物史刊行会刊、夏目漱石の項）

坊ちゃんで有名な松山中学から五高に就任早々に龍南会の短艇（*端艇）部長に選ばれた。その頃日清戦争で分捕つた大型のボート二艘を海軍省から払い下げられることになり、この舟をひきとるため、龍南会より短艇部員数名を佐世保に派遣して廻航したことがある。その帰路、龍南会の三四郎たちは大いに飲食して百円足らずを使い込み、その弁償の方法が立たずに各先生を歴訪して懇願したが、平素信用がないため全部断られた。ほどなく夏目先生がこれを聞いて、ただちに全額を償い、同時に部長を辞めてしまった。赴任早々であるうえに薄給でありながら一言の愚痴もいわず綺麗にさばいた。責任を



写真B 端艇部拡張主意書添状、石版印刷。宛先の侯野道介は漱石書生だった侯野義郎の父親「侯野道介」の四文字が肉筆／くまもと文学・歴史館所蔵



木下亀城「篠本二郎先生を悼む」(『我等の礦物』2 (7) 1933年)

重んずる点と思いい切りの良い点とは常人の真似のできないことである。

漱石が生徒の借金を穴埋めし、同時に部長を辞めたと、書かれている。金之助の当時の月給が百円で、熊本県の長者番付にその名前が載っている（熊本県一円富豪家「一覧表」熊本県立図書館蔵、ただし製艦費で一割が控除されていたから、実際は九十円。「年譜」）。飯に今の百万円相当だとして、これだけの金を使い込んだうえ、教師に泣きつく生徒も大物である。漱石は旧大名家が献金したのとは同額の月給を素行不良の生徒にポンとさし出した。

なんだか、坊ちゃんの主人公を見るようで、江戸っ子の氣つ風をまざまざと見る思いだ。しかし教育者として見れば、いかにもおかしい。飲食して大金百円弱も使い込んだ生徒、いわば問題児に、自腹を切って救済する教育者などいるのだろうか。明るみに出たら問題視されたであろう。百円弱という私的な数字がどうして公になったのかも腑に落ちない。漱石は前年の夏に結婚したばかり。新妻の鏡子は一カ月分の給料がなくなつて、何もいわなかつたのか。

そこで話の出どころを探ってみると、そもそもは篠本二郎「五高時代の夏目君」（昭和十一年『漱石全集』月報）にあるとわかつた。

を占めて居た。

以下は篠本と鈴木のお松さんという聡明な美少女と漱石の三人が同じ机にその順で並んでいた、二人で両側から彼女をいじめて泣かせたという話になる。この文を読めば、ふつうなら篠本と夏目は同学年だったと思ひ込む。

篠本の経歴は、木下亀城「篠本二郎先生を悼む」（『我等の礦物』2（7）一九三三）にある。実際には篠本は文久三年（十一月二十八日、一八六三）生まれ、漱石は慶応三年（一八六七）生まれで、四歳も違っていた。漱石の年譜を見ると、篠本が漱石と机を同じくしたといっている明治六年（一八七三）、彼は塩原金之助として父親（養父）と浅草諏訪町に住んでいた。満六歳でまだ学校には入学していない。苗字は塩原だから、「夏目

篠本は、先の主意書に登場する教員で、漱石の二代後の端艇部長であった。実は篠本は漱石と小学校が同じだったといっている。のちに五高教員として同僚になるとは、まことに奇遇というほかない。

篠本二郎元教授の虚言癖

篠本の原稿は大正六年（一九一七）に書かれた。漱石が死んだ翌年だから、追悼文集が企画されたのだろう。端艇部「事件」があった明治三十年（一八九七）からは二十年が経過していた。篠本の原稿は寺田寅彦のもとに送られてきたが、なぜか日の目を見ることなくお蔵入り、かれの死後、二十年後になつて、それを見ることができた小宮豊隆によって紹介されたものである。寺田寅彦が篠本寄稿を採用しなかつたものと推定できる。

再発見した小宮の文を引用したい（『漱石全集』別巻「後記」）。

「失礼な所を省ず、正直なところを白状すると、篠本さんの話の或物は、私には少し面白く出来すぎてゐる感がある。盲人に悪戯をする所だの、鍛冶屋の息子と喧嘩をする所だの、特にこの感が深い。しかし篠本さんはもう亡くなっているのだから、それを質す訳にも行かない。また仮令質したとした所で、既に篠本さんの頭の中ではかうした形で記録

されている以上、別にどう仕様もなかつたに違いない。したがって私達は篠本さんといふ人の人となりを想像しつつ、この思ひ出をこのまま、受け取つて置くより外、致方はないやうである。」

小宮は篠本の原稿を二つに分けて「腕白時代の夏目君」と「五高時代の夏目君」として昭和十一年（一九三六）『漱石全集』の月報に掲載した（『漱石全集』月報2、3　昭和十年版、昭和五十・一九七五年冊子体刊）。小宮本人はそれなりの留保をつけて、注意を喚起したつもりだったが、内容がおもしろすぎた。やがて『五高七十年史』も『人物史』も記事に飛びつく。すでに無批判、無警戒だった。活字になつてしまった「腕白時代の夏目君」はどんどん拡散される。『漱石全集』別巻一九九六年版）にも、さらには最近刊の十川信介編『漱石追想』（岩波文庫・二〇二六）にも収録された。今はインターネット・電子図書で巷間に流布する。

漱石と学窓を同じくした幼なじみである、という下りを引用する。

余と夏目君と相識りしは、明治六年頃と記憶する。牛込薬王寺前町に一の小学校が設立された（中略）。年齢によりて上は一級より下は六級まで分かれたれて（中略）、余と夏目君は三級にて、而も同じ腰掛に座

ら心、愉快的の資質があつた。漱石の側が小学校時代の友人を回顧した文章「僕の昔」（『全集』別冊上）では、「僕の幼友達で今、名を知られている人は、山口弘一という人だけだ。この人は確か学習院の先生かなんかしていられるということだ。詳しくは知らぬ。」としか書いていない。接点がなかつたのだから、小学校時代の記憶に同僚篠本が登場しないのは当たり前だった。（注6）

篠本二郎については「初め東京帝大化学科に入り、化学を修業したが、実験中の負傷で退学、明治十七「一八八四」年地質学および鉱物理学を自修し傍ら理科大学教授菊池安に就き同学科を修む」とある。きわめて優秀な人だったが、実験中の事故のため理学士になれなかつた。漱石よりも一年早く五高の講師になつているものの（明治二十七年四月）、教授になつたのは一年遅く、明治三十年六月で高等官七等、三十二年に六等になる（四歳下の漱石は三年前の明治二十九年に高等官六等だった）。のち三十八年に鹿児島県に異動するが、教授であつたのは鹿児島中学の方で、七高は講師だった。五高での居心地が良くなかつたと推定できる。来熊早々に職員代表にもなつて華やかだった漱石と比べ、不遇を意識したにちがいない。

君」でもない。翌明治七年（一八七四）に浅草寿町にあつた第八番公立小学校戸田学校下等小学校第八級に入学した（等級制は半年で進級する。上等小学校・下等小学校、各四級、計八級、篠本のいう六級制の記録は見ない）。明治九年五月に戸田小学校四級を終えて、実父の元に戻つて市谷柳町の第一大学区第三中学区第四番小学校、下等小学校三級に転校した。牛込薬王寺前町（市谷薬王寺前町か、のちに牛込区）と市谷柳町は隣接している。篠本が記した学校と第四番小学校は同じで、二人は同じ（のちの）市谷小学校の同窓生である。けれども年齢差があつた。明治六年に三級であつた篠本は三年後の明治九年にはとうに卒業していて、三級で転校してきた夏目（塩原金之助）と同席になるはずはなかつた。（注5）

おそらく熊本で何かの機会にて、互いに同郷で小学校も同窓であることが判明し、相互に親近感を覚えた。ただ漱石没後、篠本の側で、記憶にあつた幼時の友人悪太郎を、勝手に「夏目君」に置き換えた。篠本は夏目金之助が士族であるとして武勇伝を繰り返し述べる。モデルは士族だったのだろう。ただし夏目は町方名主の子というから、士族（侍身分）ではなく平民（百姓身分）である。同じ小学校の出身というところが本場で、あとは虚偽である。篠本にはいくぶん、いたず

夏目教授のアリバイ

篠本の回想によれば、吉田久太郎が篠本のもとを訪ねて救済を求めたのは、廻航艇二隻が無事に着いた数日の後とある。八月四日、江津湖の神水艇庫に艇は到着している。篠本は「夏目君は昨今赴任した人で、累かさねを同君に及ぼすには忍びないから」といつて自分は三円を渡し、他の職員を訪ねて哀願せよ、といっている。

事実はどうか。一連の端艇（ボート）部の事件があったとき、漱石は熊本にはいなかった。明治三十年六月二十九日、実父の夏目直克が死去、それまでの合羽町の家を一旦引き払って、夏休み中は東京で生活、熊本に戻ってきたのは九月十日で、大江の知人の家に入っている。東京への長旅で流産させてしまった妻鏡子を東京に残しての帰熊で、心は重かった。

飲食に関わる借金の支払いというものは、一カ月以上も延滞できるのであろうか。筆者は漱石がこの「事件」には無関係であったと確信する。つまり漱石には学生との接点、全くなかったのだから。夏中の東京滞在＝熊本不在は、漱石が無関係であることを示す立派なアリバイである。「事件」の存在そのものも疑わしいが、ただし完全になかったと証明できる素材がない。

る。だが濱崎曲汀「熊本時代の漱石」（『夏目漱石研究資料集成』6）によれば、漱石はほんのひと盃だけで真紅になったといい、酒苦く、蒲団薄くて 眠れぬ夜の句を引きつつ、漱石は全く酒は飲めなかった、とする。北千畑町の情景は別人との酒宴であろう。

また英国留学後にその体験を多く語ったとあって、漱石の感想なるもの（小便をしに行ったようなものだ、ほか）が記述されている。しかし留学を終えた漱石が熊本に行くことはなかった。帰国時は長崎・神戸に停泊する博多丸という船を利用しており、体調悪く熊本に立ち寄ることはあり得ない。以後、熊本、鹿児島にいた篠本と歓談する機会は物理的になかった。篠本に留学体験をハイカラに喋った人物「夏目君」は、漱石とは別人である。五高での再会時、「余は久しく君（幸之助）の名も忘れていた」。「夏目君は屢々友人の会合する場合に、余を招いて呉たが、余は概ね断りて行かなかつた。別に同君を嫌ったと云ふ訳ではない。嗜好が全然相反して居ったからである」。

こうした記述は、本当は親しい交流がなかったことを裏返しに語っている。

篠本は「責任を重んずる点と思ひ切りのよい例は、同君（漱石）として此の外にも多々あったが、一寸常人と異なつて居た。」とも

一方の端艇部長の辞任についてみる。夏目金之助が初代部長・大幸勇吉の転任を受けて部長を引き受けたのは、彼が転出した明治二十九年八月となる（『五高と漱石』）。当季新学期の開始は第一学期が九月中旬だったから、部長の任期も二十九年九月からだと考えられる。三十年五月にも部長として活躍中であつたことは、先に確認している。

第二学期は一月から三月、第三学期は四月から七月だった。漱石後任の岩田静夫講師は明治三十一年五月二十日の「龍南会雑誌」に「再任」とあるから前年の三十年度も部長であつた（『龍南会雑誌』65）、『五高と漱石』。翌明治三十二年五月三十一日の同誌(72)に、篠本教授が端艇部長に推薦され、承認を得たとある。これらは九月交替を示してはおらず、むしろ四月か五月の交替のようである。第三学期の始めに承認された。

いろいろなケースがあるようだが、教員の負担があるから、通常は一年任期の交替で、事情があれば再任された。漱石が募金集めを楽しいと思はずはない。任期一年となる九月で交替しただろう。東京から熊本に戻った漱石は、任期をつとめ終えて辞めることになつていた。至極当たり前で、ならば生徒の借金とは無関係である。

吉田久太郎はこのちも端艇部に関わる人物で、明治三十三年にも新艇発注で部長篠

書いており、この記述に漱石への目線を読むことができる。同郷の後輩ながら格上となつた元同僚・漱石。留学前には教頭心得にもなり、以後の人生にても脚光を浴びつづけた。篠本は漱石本人および多くの礼賛者たちには屈折した思いを抱いていた。

篠本が個人の伝記、回顧録を書いたとしても関心を持つものはさしてはいない。漱石を交えれば、人々は俄然、注目する。正直に数年ちがいの同窓生と書くよりも、机を並べてともに学び、いたずらもした、と書いた方が読者は喜ぶ。篠本は「俳句歌留多に興味はない。文学上の話もあり聞きたくない」と書いている。自然科学者だったから、ふだんは虚構を厭わない文学の世界に違和感を持っていたけれど、一度は、おもしろさを至上の価値とする世界に虚構（フィクション）で参画を試みても許されると考えた。篠本回顧録を、我々をはじめから文学作品すなわち虚構・フィクションと前提して読めばよかつたけれど、誰ひとり、疑う人がいなかった。



五高端艇部艇庫跡の石碑（碑に漕艇部とあるが、それは帝国大学ないし熊本大学での呼称のほず、五高では端艇部）

本二郎教授とともに長崎造船所に行つており、二度目も責任者になつてゐる。信頼できる人物だったが、濡れ衣を被せられた。

篠本二郎記述の矛盾

吉田は豪快な人物で、部員からの信頼もあつたけれど、篠本との相性は今ひとつであつた。篠本の記述のような事件があつたのか、なかつたのか、は不明だ。二十年後で記憶が曖昧になつていたというよりも、むしろ確信犯であつた。漱石との思い出を書くように要請された際に、時間も異なるいくつかの散発的な事件が統合され、膨らみ、人物が夏目君に置き換えられる。

篠本の回想の中には簡単にわかる誤りもあるし、考えれば気づく不自然さもある。まず「当時薄給に衣食しながら」と漱石が薄給だったかのように記述している。すでに述べたように漱石は長者番付にも載る高給取りであつた。篠本はそのことを知らなかつたのだろうか。これを引用した『五高人物史』もまた「薄給」と記述し、誤りを拡散した。

北千畑町でわずかに二、三軒を隔てた家にしてしばしば交流があり、「或日の夕、君（漱石）が来たから麦酒など出してもてなし」、「余はビールに酔いに乗じて」と書いていて、あたかも二人で痛飲していたかのような文があ

以上、五高端艇部員「事件」の真相を明らかにした。おそらく事件は存在しなかつた。むしろ夏目教授＝漱石は無関係である。

注1 「龍南会雑誌」は熊本大学機関リポジトリで電子公開されている。http://www2lib.kumamoto-u.ac.jp/ryunan/nokujihml

注2 岩佐正雄は龍南会雑誌(49)に論考があつて、幾何学専門のようだ。「龍南会雑誌」(59)に端艇部関係者、(72)には二部三年として名が見える。

注3 『五高五十年史』、「龍南会雑誌」(59)は二人に交渉も任されていたとするが、交渉主体は学局当局であろう。

注4 『五高七十年史』は吉田と沖が該当者のようにいうが、篠本は、沖は早くに退学したといっている。篠本の記述を『七十年史』が誤読した。「龍南会雑誌」によれば、派遣されたのは富田と吉田で、ともに注意書に署名する人物である。

注5 岩波文庫「漱石追想」（十川信介編・二〇一六）補註は、篠本の生没年を未詳としている。調査が行き届かなかつたようだ。また漱石入学校や入学年の矛盾に気がついてはいるけれど、「篠本の記憶違いか」ですませている。

注6 角川書店版全集年譜は小学校の友人として島崎柳塙、桑原喜市、そして篠本を挙げている。

はつとり ひでお・くまもと文学・歴史館 館長